疫病退散の牛頭天王信仰

七月の京都は八坂神社の祇園祭りでにぎわいます。八坂神社はかつて祇園感神院とよばれ、牛頭天王という疫病退散に利益のある祭神を、神仏混交で祭祀していました。ところが明治維新直後に「某権現、或いは牛頭天王の類」など神前で仏式の祭祀をおこなっていた社寺については、由緒を取り調べた上で神・仏をはっきり区別するようにとの神仏判然令が出されます（神仏分離）。

市内に伝わる記録をみると、江戸開城により名実ともに新政府が実権をにぎった慶応４（1868）年４月の翌月（閏４月）には、いち早く村の庄屋までその指示が伝わっています。神仏分離は新政府の優先課題のひとつだったのです。

「広嶺天王」の掛軸

市内にも牛頭天王は各所に祀られています。このことは疫病退散が人々にとって切実な願いであったことを示しますが、神仏判然令によって市域の牛頭天王社の多くは、神社として感神社を名乗ることになりました。この名称はおそらく祇園感神院にちなんだものでしょう。市域のうち三田藩が支配していた地域の場合は、明治維新以前から藩の政策として廃仏の動きがみられ、結果的に神仏の分離が進められていました。そのことが明治２(1869)年の大規模な一揆の遠因となったことは、市史第５巻近代資料Ｉで解説されています。

現代の「宗教法人名簿」によると、市内には６社の感神社と高平地区に２社の八坂神社があります。また独立はしていませんが、境内の小宮として祀られている牛頭天王も各所で見受けられます。この密度の高さには、人々の疫病退散への願いのほかにも、別の事情があった可能性があります。かつての市域では、やはり牛頭天王を祭神とする広嶺神社（現姫路市内）からの布教が盛んであったようで、最古の史料は室町時代にさかのぼります(市史第３巻古代・中世資料参照）。市域での牛頭天王信仰の広がりについては、京都祇園とともに広嶺神社の影響も考えてみる必要があるようです。

総務課市史編さん担当